ＳＡＴ活動に主眼をおいた大学との連携
「スーパーＳＡＴ活動へ」
～学校現場の即戦力の人材育成をめざして～

谷村第一小学校
校長　大竹　太

1，SAT活動の現状

（１）SAT－Aについて　※大学4年生の学生が来てくれる（８名）

◎放課後における学習支援

①日時　　毎週水曜日の15：15～16：30

②対象者　5・6年生の希望者　約20名の児童

※基本的には希望する児童だが、担任が調整をしている

※基礎基本が徹底されていない児童が希望（家庭より依頼）

③内容　　プリントなどを利用しての学習　その日の学校の宿題

④その他　SAT－Bを経験した学生が多い　教職志望の学生が多い

（２）SAT－Bについて　※大学3年生の学生が来てくれる（38名）

◎授業支援

①日時　　学生の都合のよい曜日でだいたい2．3校時に入る

※中には、午前中ずっといる学生もいる（希望に応じて）

②対象者　全学年

※学級の決定はSAT担当が行う

③内容　　授業中における学習支援及び教員補助

※時には、宿題やプリント、テストの〇付けも依頼することもある

④その他　教職志望者が多い

（３）SAT－Cについて　※大学3年生の学生が来てくれる（２名）
◎特別な支援が必要な児童の指導
①日時　　学生の都合のよい曜日でだいたい2．3校時に入る
　※今年度の谷一小は月曜日に来校している
②対象者　通常学級の所属する特別な支援が必要な児童
　※児童については学級担任からの要望に応じて特別支援コーディネーターが決定する
③内容　　授業中における学習支援
　※時には、担当の児童以外の児童の支援を行うこともある
④その他　教職志望者が多い（特別支援学校）

（４）全体に関わって
①SAT運営委員会の実施　4月下旬と2月中旬
　※SAT活動について学校現場、大学、教育委員会とで協議をする
②各校のオリエンテーションの実施
　※例年、5月上旬に実施→その翌週からSAT活動開始
③大学から離れていて公共交通機関のない学校にはタクシーで行く
　※調整は教育委員会で行ってくれている
④回数は、年間で30回程度（１回につき90分間程度の活動）
⑤学校行事等でできないこともある（天候不順及び感染症の流行などの時も不実施）
⑥年間数回、保護者や現場の教師と懇談会がある（大学主催で実施）

2, SAT活動の成果と課題について

（１）成果について

・学生が子供たちのことをしっかりと支援をしてくれる→授業の安定
・子供たちと休み時間によく遊んでくれる
・〇付け、授業準備などの補助をしてくれるので、教員の多忙化の解消にもなっている
・子供たちの気持ちの安定にもつながっている（外でよく遊んでくれる）
〇現場のことをよく知ることができる
〇児童への対応の仕方について学ぶことができる（学習支援、生活指導等）
〇現場教師の指導を見ることができる（自分の今後の実践に生かすことができる）
〇現場の教師の児童への対応の仕方を知ることができる→自分の実践へ
〇現場の教師から生の声を聞くことができる

（２）課題について

●学生が学習支援の仕方が分からずに、ただ授業を見ているだけの時がある
→ただ授業の邪魔になってしまう時もある
●どんな教材を使って教えていったらいいのか分からないときがある
●児童について理解することができずに学習支援の効果が上がらない面がある
●児童理解が不十分で子供たちと心が離れてしまうときがある
●児童理解ができず、不適切な指導により、保護者からクレームが入ることもある

3, 課題の解決に向けて

（１）SAT－Aについて

○担任が1ヶ月に1回、30分程度、SAT活動に参加する

→どのようなプリントを使うのか

どんな風に指導をするのか

児童への対応方法について（個別の児童理解）

（２）SAT－BとCについて

○各学級担任が座席表を用意する

→座席の並び方（顔と名前をしっかりと覚える）

座席表の中にその子の特性について記入（担任からの要望も含めて）

○校長が学生と面談を行う

→校長が各学級の特性を理解しているので、それを学生に直接伝える（個人の特性も含めて）

学生から教室に入っての感想や課題点などを聞く（学生の意識）

授業支援や個別支援についての目標を設定させる

学生の困りごとや指導に迷っていることに答える

学生に児童理解の方法について伝える

学習支援のあり方について伝える

○担任がファイルを見終わった後、気がついたことを付箋で知らせる
→学生の疑問に答える
さらに追加でお願いしたいことを伝える
学生への感謝の気持ちを伝える（学生の自己有用感を高揚させる）

◎その結果・・・・・
○学生が生き生きと活動をしている（自信をつけている）
○担任が望んでいるような支援をしてくれている
○子供たちとの関係性もとても良くなってきている
○担任の指導に対して批判をするのではなく、どうすれば支援が効果的にできるか考えるようになってきている
○担任の学級経営や授業づくりの補助になってくれている

4, さらにその先の活動として⇒スーパーSAT活動へ

◎SATの学生にアルバイトの勧誘

○谷村第一小学校の「学力向上支援スタッフ」「スクールサポートスタッフ」として働いてもらう

※学校として：教員免許が必要のない職員の不足を補うことができる

※学生として：現場の雰囲気をこれまで以上に知ることができ、年間を通した活動を体験できる

→両者にとってメリットのある活動となる。

◎学生を雇用するまで

①学生にアンケートを実施する（別紙）

②アンケートの①または②に回答があった学生に電話をする（２月頃）→再度、意志確認をする。

③4月になって学生の前期の授業日程が決まったところで任用の面談をする

※これについてはできれば3月の下旬に行っておきたい

→ただし、学生の授業予定が決まっていることが前提

※この面談の際に、詳しいシフトを決めておく→できるだけ切れ目のない支援ができるように

◎学生が勤務し始めての実際（別紙）

①校長が次週のシフトを確認する

※学生のその週の予定について確認をする

※学校の予定（学校行事、短縮授業、授業カットなど）を確認する

②今週と次週のシフトをテーブルの上に置いておき、それぞれの学生に確認をしてもらう

③１週間の授業の中に誰が入れるのかの表を校長が作成する

※給食数の確認なども行う

④１週間の授業表を元に教頭がその日の支援表を作成する

⑤月末には学生が記載した勤務表と校長の作成したシフト表を照らし合わせ、給与を確定させる

また、給食数を確認し、学生に請求する（給食については実費）

5, 学生アルバイトの成果と課題

（１）成果

○学校としては、なかなか人材が見つからない所に、学生が来てくれるのでとてもありがたい
○教職を目指している学生なのでモチベーションが非常に高く、能力も高い
○学校のこと、職員のこと、子供たちのことをよく知っているので、安心して任せることができる
○子供たちの支援がとても上手い（昨年度のSAT活動の成果・校長が面談した成果）
○今年度、SAT活動に来ている学生のよいお手本になっている

学校としては、なくてはならない人材となっている

もし、彼らがいなかったら・・・・・・

（２）課題

●学生ということで、授業の合間を縫っての活動となる（毎日入ることは不可能）
●教育実習、教員採用試験の時など、長期の休みになってしまうことがある
●体調を崩してしまう学生も時折いる
※授業支援予定を変更することがとても難しい（教頭担当）
●学生の待機場所の確保が難しい（職員室は今、もう一杯になってしまっている）
●市教委で用意してくれている時間数に達していない面もある
●シフトの作成、給与の支払い、給食費の徴収など、仕事を増やしてしまっている面がある（教頭）

以上の課題を差し引いても・・・

・今年度は欠員でのスタートを切った（定数の職員が配置されていない）
・５月上旬には、療養休暇を取得し、２ヶ月の休みに入った職員がいた
・教室に入ることができない通常学級の児童→多数
・とても手のかかる子供たちの存在

谷村第一小学校としては、とても有意義な活動となっていることは間違いない！！

ご静聴ありがとうございました！